

子どもの宗教心と箱庭

— 拡充法により日本文化の原理を探る —

森下 温美 (関西医療学園)

I. はじめに

大陸では単なる精神性に過ぎなかった禅や易の思想が、我国で水墨画や枯山水となりながら習合を深めつつ庶民の生活に浸透し、やがて日本人の集合的無意識と化したという歴史的事実は多くの先行研究に明らかである。しかし日本人の宗教観と言っても過言ではないそれらと箱庭との関係については、まだ研究されていない。生きるためにセルフと格闘せざるをえなかった子どもの箱庭における無意識の思索の跡を、パラケルススに倣い【コスモロジー的視点】で【自然の光】において考察する。

II. 事例の概要

クライアント (以下 CI と表記) は小学校三年生女児で、DV被害に絶望した母親から殺害されそうになったことから不安定に陥っていた。二次被害防止のため詳細が不明で治療枠も曖昧な DV シェルターの特殊性に筆者 (以下 Th と表記) は戸惑ったが、結果的に禅的な方法や C,G,ユングが独自の心理学的原理を発見した状況に近い形で箱庭が制作され、CI は短期のうちに自分を取り戻し、母親との関係を修復することにも成功した。

III. 事例の流れ

1 箱庭① 強く内向し不安も葛藤も大きく自我は振り切れる寸前の心もとなさだが、何としても箱庭を完成させたい気持ちが伝わってきたので、イメージが降りてくるのを時間をかけて一緒に待ったところ、池に橋をかけて渡る人形が出現した。
 # 2 箱庭② 気合いを入れてじゃんけんしたので一番乗りできた嬉しそうに現れた。# 1 の葛藤が形をとりはじめ、見性し続けてゆこうとする静かな決意も表現された。
 # 3 箱庭③ 心が少しほぐされて軽やかになり、隠れた主訴が不安気に意識に浮かぶ一方で、作品から自然について問答するうちにアフリカのイメージと気づき、生き活きしてくる。
 # 4 箱庭④ 心に野性味を取り戻し、イメージをリアルに具現化したい気持ちが高まると、作品に自作の絵が混じり始める。
 # 5 箱庭⑤ 母のことやジャングル、海外に想いを馳せつつ、伝統の感覚に触れる一方で、現実には母親に攻撃的になる。
 # 6 箱庭⑥ 作品に理想の家を見つけ、銀の道を作り、集合的な問題について話しながら、母親を肯定的に受け入れる。人魚姫の話題の後、箱庭では太母から離脱する表現が出現する。

7 箱庭⑦ 頭とお腹という身体的な話題のあと、異質な存在による「盗む」表現や、死と再生の練習を表現する。母親が来室し、入所までの経過と CI に対しての思いを語る。

8 箱庭⑧ Th に「抱っこさせて」と甘え、箱庭では【食い始め】のような世界を表現する。

9 箱庭⑨ 天使に羽をつける一方で、魔女の家に木をたくさん植える。

10 箱庭⑩ 避難訓練 (避難場所からさらに避難) の後、勉強はできないけど、これからがんばると宣言し、ラストと意識して #1 でどうしても作れなかった作品を完成させる。

11 箱庭⑪ 思いがけず 1 セッション追加された。砂を少し白くし、「涙の形」を 5 つ作ると、大空を眺めるように仰臥した天使が現れた。男の子は弱虫に見えてはいけなから、大きくなるしかないと言う。テレビのお天気お姉さんの予報は大吹雪。夢を報告しながら箒とベッドを作る。作った枕に頬ずりし、「この中にはいたい」と言う。と、だんだん集中力が低下し、折角つくった箒も折れ、もはや何も作れなくなった。Th に促されて CI は創作意欲の消失を受け容れた。

IV. 考察

いわゆる宗教心は万人に存在し、セルフとの出会いにより感得される。その時期や形は千差万別だが、自己実現の過程には一定の法則があることを『十牛図』は示している。阿闍世のように侵襲され機能不全を起こした CI の自我は、表現活動をただひたすら見守る Th に自らを投影するうちに脚下照顧 (集合的無意識に退行) し、スサノヲ的に自らを泣き枯らしながらゼロになって「無」を創造し、アマテラスの如く宇気比 (コスモロジー的な自己の再把握) する過程を経由し、始得 (リセット) した。絶望という魂の限界状況で、【気合い】という極めて東洋的な概念を自らに吹き込み、易学の日本的限定である【じゃんけん】に身を委ね自己治癒していったのは、【百尺竿頭】的努力である。仕上げの雪は易学での【絶対無】のイメージで、『雪山童子』『鶯嬢』等も連想させる。未来を夢見ることが怖かった CI だが、西洋的な弁証法では到底説明がつかない日本神話の哲学を生き抜いた。それは西田幾多郎が歴史的な身体と名づけた場所での出来事でもあったのではないだろうか。